

浄運寺を尋ねて

……大野郡の古刹……

安 部 巖



浄雲寺を尋ねて

大野郡三重町浄運寺

の境内、そこに天授の塔があるときいて尋ねて見度い気持にかられ去る八月、三重町の郷

土史家伊東東氏から見

学要項をきゝ一人で西

台山浄運寺を訪れた。

小さな畦道を伝いな

がら始めて見る四面の

なだらかな山々、射る

ような濃い緑の草原、

山並とその間に展開す

る田園……漸くにして浄運寺前の往還に出る。

広々とした三重盆地を走る幹道山寄りの地点である。左を

望めば広々と続く緑の水田とその中を走る白き道筋の消ゆる

所は三重の町か、右を望めば山麓に白壁の寺院が美しく見え

る。それが西台山浄運寺である事は、伊東氏の話から直に理

解出来た。

……千年の歴史を秘めた浄運寺……

苔むした山門の礎石と、宝曆三年燈籠塔、又この燈籠塔を

支える石畳……之等はさして古いものではないが、何かしら

古びて見えるのは私の感覚のみであろうか。

こんな事を思いながら山門に目をやると、その額東が人の

世界を勧むように大きく、美しく覆いかゝつて来る。

私は子供のようになつて足を庫裡に運ぶと、中学生の

人が出て来られ、いろいろと無邪気に寺の事を話して呉れた
それをきゝながらふと目を前庭を見やると何か意味ありげ
な石造遺物が目に入る。五輪の形骸であらうか。或は手洗鉢
であらうか。



近寄つて見ると、

『皆天授二丙辰□月
廿二日』

末時畢沙弥源秀六

十二”

と朽ち果てた字で、

漸く判読出来る。

これは、五輪の塔身を

手洗鉢に彫りかえたも

ので、故日名子太郎氏

の金石年表にも見ゆる

五輪塔である。

天授二年と言えば、

北朝年号で永和二年、西暦一三七六年であり、足利義満の治

下、物情騒然として、時の天皇は南北両朝に分れ、民は塗炭

の苦しみに追込まれた時代である。而して之を国東地方、庄
内地方に見ゆる北朝年号の塔と比較検討する時、時の社会の
一端をこの塔のこまにうかがい知る事が出来、当時於て
この浄運寺が如何なる政治的な役割を果していたか、又地方
の民と如何に結びついていたか、大きな課題を呼んでこの塔
身は浄運寺境内に残存するのである。

× × ×

天授二年五輪の調査も終つて寺院本殿裏山なる古式のつゝ
じ園に入る「比類なき名苑」こんな言葉が当てはまりそうな
而も自然の火成岩層に造られた公園である。

ここからは浄運寺のがらんを眼下に三重の盆地を一望の中

に収める事が出来るが、この公園の外れるところ草深き平台

に一基の宝篋師塔がある。

その銘には、

〔文中二二年卯十一月日大願主

真阿沙弥玄用沙弥道慶菅原在信

源六□□五郎左近允彦三郎、文五郎

□□長三郎、宗吉、彦五郎、式近二郎□四郎

彦八結縁者尼竿阿口知大工為宋中

阿法知右志者

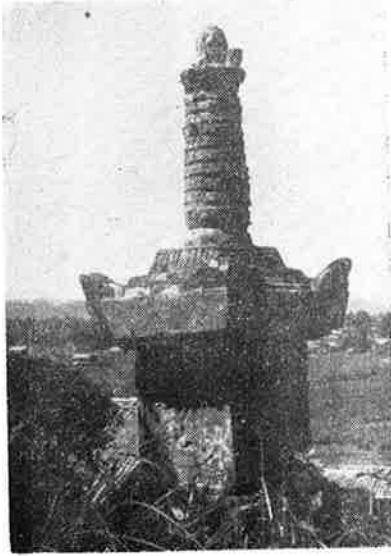
為別時衆現世安穩

後生善処也仍所

修如伴」と記されている。銘文を読みながらいろいろな事を考える。

文中四年と言えば、天授元年である。文中四年五月二七日に天授と年号は改元されたのに、この塔に文中四年十一月と記されているのは甚だ寿異だ。

然し、宝篋師塔の形式、銘文の字体、その手法等から勿論



浄雲寺を尋ねて

偽物とは考えられず、矢張り五月二十三日の夜に...

文中四年十一月と記したものと解すべきであらう。この...

うな例は何も大野郡だけに限る事なく高田市始め各地にある

勿論文中は南朝年号であるから文中四年(天授元年)寛篋

師塔は長に記した五輪塔より一年前に造立されたもので。そ

の意趣は、銘文に見られる如く、現世安穩後生善処」とあり

意趣銘文共に室町時代前期末の世想を反映している典型的な

宝篋師塔と言う事が出来よう。(形式上の問題はしばらくお

く)

× × ×

夏の日盛り、私は浄運寺を尋ねて、以上の如き事を感じた

が、尚お不審に思う事は、久知良の地名である……………この

名が頭に残つて仕方がない。

(一九五六、九、九、台風十三号の夜)